

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポラ幢ケ谷九〇四 電話(03)337714649 FAX(03)329915367
振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 東京労金本店 No.1154163

購読料 月額 600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

展望のない社民党、党建設本格化の新社会党 上野 建一……………2

資料「新社会党・平和連合」アピール……………3

新社会党への参加・協力を訴える……………3

迫りきたる一大攻撃と対決して……………4

——労働運動・政治闘争を第一歩から(二)—— 坂牛 哲郎……………4

国鉄闘争・反基地反安保闘争勝利の年に……………6

——沖 縄 と 北 海 道—— 稲村 守……………6

歴史科学 Ⅱ 社会科学の課題 中澤 秀行……………10

——階級および階級闘争・護憲について(三)—— 富山 栄子……………13

いかなる状況下でも解決策を探す……………13

——社会主義とその成果守るキューバ——……………13

投稿 三島地区「新社会党・平和連合」準備会が発足……………15

読者からのおたより……………16 編集部だより……………9

◇残部僅少 上野建一著 社会通信刊◇

政界再編後を読む——護憲の旗を掲げて

四六判上製、二百頁、千五百円(千三百十円)

旬刊 社会通信

NO. 627

一九九六年二月一日号

一九九六年二月一日発行
(毎月一日・二日・三日三回発行)

■巻頭言■

展望のない社民党、党建設本格化の新社会党

橋本自民のドロカブル社民党 旧日本社会党は一九九六年一月十九日、五十年の護憲の党、勤労国民の党としての歴史と伝統を捨てて、ついに一部保守勢力（「さきがけ」など）との合流をめざす過渡的新党としての姿を変えた。党名も「民主党」に党内弁明用に、しかしいつでも取り外すことができるよう「社会」を上に乗せて社会民主党となった。党名に社会をいれても「社会党らしさ」は戻らない。社会民主党と名乗っても社会民主主義の党ではない。この党の基本理念にも政策の基本課題にも社会民主主義の理念は認められてない。ただ規約のなかに「民主主義の共同の家であり、社会民主主義者、リベラル勢力などさまざまな人が参加し」とあるから社会民主主義者（これもあいまいな呼び方だが）も今のところは追い出されないということのようだ。

いずれにしても旧日本社会党は変質して、限りなく保守党に近づく、縮小再生産型新党として発足したのである。ついでに云うならば、昔民社党ができたとき、社民と民社はどこが違うのかという議論があつて、結局「カレーライス」と「ライスカレー」の違いがいろいろのことだということになった。

社民党に少しでも明るい展望はあるのであろうか。改めて見直してみてもお世辞にもあるとはいえない。社民党の最大の「目玉商品」はさきがけとの合流であるが、合流に成功したとしても、さきがけは丸ごとにはならず分裂する可能性が強い。それよりも社民党にとつては、政策・方針上、よりさらに第三保守党の方向とならざるをえず総選挙対策上（合流は五月頃といわれる）もプラスはない。また橋本内閣に久保蔵相を送ったことでも社民党は大きく国民の不信を受けている。「沖繩」「住専」「消費税」そして「不景気と失業者」など橋本内閣の弱点が重大問題となつて、久保大蔵大臣（副総理）に非難が集中するのであろう。

組織的にも、一月十九日の新党化によつて社民党の分散化は進行している。あくまで新党に行かない人々によつて離党、支部・総支部の解散、分裂が続々と起こっている。内憂外患ともごも来るの社民党に展望は開けない、であらう。

「新社会党」党つくりの基本 新社会党は旧社会党最後の大会の同じ日に「新社会党の全国的結成のための決起集会」を開催して本格的党つくりに入力した。この集会アピールは「いま私たちは新たな歴史的任務が負わされています。この頹廢しきつた旧社会党と決別して、全国津々浦々に、平和憲法を守り庶民の立場にたつた政治を実行する新たな社会党の旗を打ち立てることが是非とも必要です。」と全国的に組織をつくることを訴えている。三月三日には新社会党の第一回全国大会が開かれるので、それに向けて党組織の確立を求められている。

それでは、新社会党の組織建設とその運営の基本的考え方はどうか。護憲の党、勤労者の党としての原則を明確にして、庶民と勤労者に広く門戸を開き、大衆運動を中核に住民・市民運動を重視しながら保守勢力と対決できる革新的行動の党をめざしている。

①党内民主主義の原則が十分に実行されること（旧社会党が転落した最大の原因の一つは党内民主主義を蹂躪し、信頼の薄い幹部の独断であった）。②党の理念をもとに勤労国民から広く入党できるようにする（本人に入党の意志がないのに、労組幹部の手で大量入党をはかるやり方は、ふやけた党となり、大切なときに労組幹部の介入を許すことになる）。③党の組織が大衆のなかに広く根をおろし、行動性のあるものにする（党は住民・市民のために行動するなかで信頼をえるのである。声はすれども姿は見えずでは党は発展しない）。④党はリーダーシップを発揮する機能をもつこと、敏活に活動できる組織づくりに努力する（政策・方針を政治課題や社会的問題に明確にできないでは政党としての役割は果たせない。理念と実践の統一が重要である）。⑤党の政策・方針（地域政策の重視）を正しく豊かなものにするため、常に学習・研究会、シンポなどによつて党内外の英知を結集すること（政党は国会議員の数が少なければなおさら、党内外の知性を吸収、集積することで行かなければならない）。知は力なりだ。

（本誌編集主幹 上野 建一）

資料■「新社会党・平和連合」(一九九六・一・一九)

新社会党への参加・協力を訴える!

社会党は本日の大会で事実上の新党に変質し、第三の保守党に姿を変えることとなりました。この事態に対して私たちは新年とともに『新社会党・平和連合』を旗揚げしました。私たちは、平和で民主的な社会改革を求めて憲法とともに歩んだ社会党の五〇年の歴史とよき遺産を継承するとともに、それを二十一世紀に向けてさらに発展させようと決意しています。

旧社会党は「社会民主党」と名乗ったものの、新綱領では社会民主主義が完全に棄てられ「自由民主主義」が宣言されています。憲法の「国際協調の理念を創造的に発展させます」として、解釈改憲のみか明文改憲をも認めようとする「創憲論」が中心になっていきます。冷戦構造は崩壊し、平和憲法がますます輝きをまわしているときに、護憲と不戦・非武装中立の旗を捨て、「限定防衛」容認と憲法見直し創憲論の党に変わるといふものです。

گران高原への海外派兵、日米安保条約堅持と社会党委員長である村山首相による大田沖縄県知事の告訴、安保条約の「再定義」による極東から全世界への拡大・強化、「新防衛計画大綱」(「次期中期防」軍事増強と防衛予算の伸び率アップ、違憲の法律である破防法の団体適用、消費税の大幅引き上げ、住専問題での巨額の血税利用等、旧社会党は魂をすっかり棄て去りました。

このように、もはやこの党は庶民の立場にたつてこれらに立ち向かうことはできません。さらに橋本内閣への入閣は、社会民主党の崩壊と死滅を決定的にすることでしょう。

今後「時代の要請に応じた憲法の見直し」を『政治理念』とする新党さきがけと合流する次の段階の新党がもし実現するとすれば、さらに徹底した保守党に転じて社会民主党は雲散霧消するほかないでしょう。

私たちはこの重大な事態をみすごすわけにはいきません。いま私たちは新たな歴史的任務が負わされています。この頹廃しきつた旧社会党と決別して、全国津々浦々に、平和憲法を守り庶民の立場にたつた政治を実行する新たな社会党の旗を打ち立てることがぜひとも必要です。

『私たちの当面の政治目標(九六年綱領)』を高く掲げ、それを実現するための運動と仲間づくりを開始したいとおもいます。いま日本にとって、このような党の誕生と成長こそが必要不可欠です。

元旦の第一段は小さき旗あげでしたが、これらの運動に取り組むことによって、全国的に多くの皆さんの支持と信頼を得て、急速に発展することが出来るかと確信します。

すでに日本の知性と良心を代表するような多くの学者文化人や市民運動家などからも、新社会党にたいする歓迎と期待が寄せられています。

この党が、一日も早く時代の逆行を阻止して進歩を担うことのできる力を持った党に大きく育つように、心ある皆さんの積極的な協力とご参加を強く訴えます。

※「新社会党・平和連合」の資料を必要な方は社会通信社までご連絡ください。とりつぎいたします。

※この資料は決起集会での呼びかけです。結成大会は三月三日(日)午後一時より、場所は日本青年館です。

迫りきたる一大攻撃と対決して

——労働運動・政治闘争を第一歩から(二)——

東南アジアの変貌

一九九六年、二十一世紀まで、あと五年である。この年、日本の労働者、勤労国民の職場・生活はどうなるのであろうか。そして、我々はどうたたかうべきなのか。年頭に当り基本路線を明らかにしておきたい。

一九八五年、ソ連、東欧の情勢があやしくなってから、私は二十回近く、海外にでかけている。ソ連、東欧、西欧、北欧、アメリカ、カナダ、ラテンアメリカ、中国、ベトナムである。昨年は、ミャンマーを中心に、タイ、カンボジアを二十日近く歩いてきた。

その時どき世界をゆさぶる火だねとなる地域を、この目でみ、耳で聞き、己のエネルギーとするためである。しかし、それだけではない。その国の人々が日本を、日本人をどうみているかを知るためにでもある。

中国を含めて、東南アジアの大都市に一歩足を踏み入れると、異様な活気に圧倒される。上海、サイゴン、バンコク、ゴミゴミした小路の両側に、バナナ、ココナツ、マンゴー、名も知らぬ果物が雑然と山とつまれ、大きな肉のかたまりがぶらさがっている。

溢れ出る人なみの足もとで、半裸のこどもがはいづりまわっている。むんむんする香り、熱気がたちこめている。東南アジアはこれからである。この熱気、活力は、ソ連、東欧はもちろん、他の国に見出すことはできない。

かつて、マルクスは、社会構成体の分析でアジア的生産様式について言及した。その停滞性、専制君主によるデスポテズム、全一的支配が長い間、論争のまよになつてきた。

それは、水田耕作を主体とする農業、その用水確保のための大規模灌漑工事を必要とする生産様式によるものとされてきた。

しかし、いま東南アジアは、深化する世界不況の中で軒なみ、一〇%に近い高成長をつけている。この急激な変化はいづれも、八十年代後半からである。明らかにME技術による生産技術の革命的進展は、全世界を単一市場とし、日本をはじめ、全世界の資本が東南アジアに投入され経済成長をうながしてきた。農業を破壊し、環境を汚染し、貧富の差を拡大し、全社会を根底から変えつつある。

タイ人は日本をどうみているか

東南アジアの詳細については、別稿で報告するが、日本資本が大量に投入されているタイの人々は、日本をどうみているのであろうか。

この国への日本投資は、八十年代後半から激増し、第一位となり、アメリカ、シンガポール、台湾がこれにつづいている。激増する人口に都市整備が追いつかず、世界一といわれる車の渋滞により、排気ガスが鉛色に全市街をつつんでいる。

夜になれば、中心街の一角を占める歓楽街タニヤは、日本人に独占され、エリート・ピ

ジネスマンは、色白のタイ美人を擁し、東京からきたお客を接待している。このタイ女性
はほとんど、東北地方の崩壊する農村出身者である。

この日本人ジネスマンは、タイ人が驚く高給を取り、タイ人労働者を駆使し、日本の
経営により、高利潤を上げる。タイ人は、この日本人をどうみているのであろうか。

増大するインテリ層、新中間層ほど、日本に対する批判は鋭い。一九七四年、田中首相
訪タイのとき、大学生が中心となり、日本商品ポイコットのデモでむかえた反日感情は、
タイ労働者、国民の心の底にどす黒く流れている。

「日本企業は、我々を差別する、いくら業績を上げても差別する。幹部に登用しない。」
日本商社に働くA君はいう。

「日本人は、みんな、会社のためには、どんなことでもする人種なのだろうか、もうけ
のために、政治も社会もすべて動いているのだろうか、労働者はどうしているのだろうか」
ジャーナリストのB君はいう。

「村山首相は急に変った。社会党も変った。又、大きな軍隊で我々をおどしつけるので
はないか」大学生のC君はいう。

タイメン鉄道の起点に博物館がある。ここには十数万のビルマ、オーストラリア、タイ
人を酷使し、死に追いやった記録、写真、絵、作業具が陳列されている。第二次大戦中の
残虐行為を、タイ人は決して忘れてはいない。

「日本軍は、ヨーロッパ植民地から、東南アジアを解放した」と、村山内閣閣僚は、再
三にわたり公言した。村山首相、そしてその所属党の社会党に対して東南アジアの人々が
どんな感情をもつか、記すまでもないことである。

日本政府の首脳、そして又、新党結成にうつつをぬかしている、社会党首脳は、自分た
ちが、世界の労働者、国民からどんな目で見られているか、少し考えてみたらよい。かつ
てベトナム反戦、日韓条約反対をたたかった社会党、日本労働者の姿は消滅した。資本の
走狗となりはて、安保・自衛隊を容認し、アジアを支配せんとしている変節漢の姿が目
映るだけである。

アジア分業体制の確立

私の長男は、バイオニア、ロサンゼルス支店にいたが、いま日本に帰り、東南アジア、
中国を歩きまわっている。所沢工場を縮小し、バンコク近辺に、二千名規模の工場をつく
るといふ。主要部員は日本からもつてゆき、シンガポール、マレーシアから付属部品を購
入し、バンコク工場で組み立てる。

既に「社会通信、六二〇号」で報告したように、アジア規模の分業体制は進展してい
るのである。九五年通商白書が「わが国の企業は、あらゆる利用可能な資本、技術といった、
生産要素の国際的動員により、市場のニーズに対応した活動を展開し、東アジア全体を覆
う形での分業ネット・ワークの構築過程を加速させている」と報告している。

既に八五年以降、東南アジアへの直接投資、開発援助資金は激増してきた。いま、日本
財界は深化する不況脱出のため、アジア全体の分業体制の中に、日本の産業構造改変を位
置づけ、日本列島の一大合理化運動をすすめようとしている。

日本産業構造、雇用形態の一大転換

日本経営者連盟（日経連）は、九五年、例年のように春闘に対する一月報告書（「労開研報告」）を出したが、これにつき異例の五月報告書「新時代の日本の経営」を出した。一月報告の要旨は次の如くである。「自動車、電機、鉄等の輸出製造業は、ME合理化をすすめ、国際競争力をもっている。しかし流通、金融、サービス産業等の第三次産業、農業等の第一次産業は、合理化に遅れ、二千万の余剰労働力をかかえている。そのため輸出産業のコストは割高となり、九十年まで、世界第一位であった国際競争力はいま第六位にまで落ちこんできた。このままでゆけば、日本経済は危険な状況におち入る。第三次産業中心とする、二千万余剰労働者を合理化し、これを住宅建設、マルチメディア、バイオテクノロジー等の新産業に吸収しなければならない。

このため、日本全労働者の労働者移動をすすめなければならない。この新しい時代に即応する日本的雇用形態とは、日本の労資慣行を抜本的にみなおし、終身雇用、年功賃金は廃止し、職能給制度に切りかえることである。正社員、本工は最小限に止め、短期雇用契約により、パート労働者、個人契約の高度専門労働者を主力とする。」

五月報告は、雇用形態の転換について詳述し、既に実施している十数社の具体例を、例示している。詳細は、「社会通信」六二二号、六二三号「日経連、新時代の日本の経営」を再読されたい。
（坂牛哲郎・つづく）

国鉄闘争・反基地反安保闘争勝利の年に

— 沖繩と北海道 —

国鉄闘争開始から十年

九五年十一月中旬に、厳冬が始まろうとしている北海道を訪れた。一〇四七名の解雇撤回、三二四一名の地元JR復帰をめざして闘う国鉄闘争団の仲間との交流である。オルグは、午後三時半には夕暮れとなる日本列島の東の地、十勝・帯広から始まった。空港に迎えて下さった闘争団・Kさんの車で一時間、可愛らしい入口のついた隣町の「スモークハウス」では、ハム・ソーセージの手作り作業中の三人の団員が迎えてくれた。

八六年十月九・十日の国労修善寺大会直後の決起集会以来、何といっても思い出すのは「国鉄最後の日」八七年三月三十一日の、国鉄京都駅前の八千人のヒューマンチェインである。そのとき「京都からのアピール」を出して、三・三一を全国総決起の日にしようと呼びかけた。そのアピールを受け止め、北海道の新得というところで大衆行動をやられたというのである。ちよつと地図で捜してもわからず、当時京都のメンバー一同ずいぶん感激したものである。車の中でKさんが、「私は新得の駅で働いていました」と言われ、たいへんなつかしかった。

その後も何度にもわたる大衆集会や様々な取り組みを行ってきたが、九四年と九五年の春には、「国鉄清算事業団闘争勝利をめざす京都共闘会議」で、就学援助カンパを取り組んだ。これは、国鉄闘争の空洞化が言われたりしているが、闘争団の常駐化をはかる力のない私たちとして、闘争団家族との文通でも行われれば、との思いで始められた。

早速心のこもるお礼状が次々に届いた。「学校に通うのに、自転車欲しかったので、早速買わせて戴きました。親に迷惑をかけさせたくないのです、アルバイトをしてお父さんお母さんの足しになればと思っております。」三ヶ月前までは希望する高校があり、どうしてもその高校へ行きなかつたのですが、それはお金のかかる私立高校だった為に、あきらめなければなりませんでした。今でも行きたいです。この様な悲しい思いをする事のない為にも、一日も早い解決をし、地元JR会社に戻れるようになればと思います。」という新高校生の男女。「きょうとのおじさんおばさんへ。おいわいくれてありがとう。べんきょうするからね。」という小学一年生の男の子の手紙には、読むたびに目頭を熱くする。国労闘争団の平均年齢は、私の年と同じ四二歳。これから子供の教育費にお金のかかる年頃。自分の子供が小学校や中学校に進むにつけ、闘争団の一人一人の顔を思い浮かべる。中曽根元首相の臨調行革、それと裏腹の労戦問題にともに立ち向かってきた同時代の仲間として、国鉄闘争を自らの問題として闘ってきた立場でいくつかの問題提起をした。

労働争議は終わるもの

「闘い・運動」を改良闘争と社会変革の闘いの二つに大別すれば、「国鉄闘争」といえども改良闘争である。国家的不当労働行為として行われ、かなり国の政治の根幹に関わる民間活力導入という経済の枠組み全体に波及する大きな闘いではあるが、労働者の解雇撤回をめざすという経済闘争ではある。

改良の闘いを積み上げていく中で構成員の意識と思想を高め、労働者の組織を強化して社会の仕組みを根本的に変えていく力としていくのである。改良闘争はだからどこかでけじめをつけ、言葉を換えれば「妥結」し、教訓を明らかにして次の闘いに進まねばならない。一回の春闘で「とことん」闘い、搾取の廃絶までつき進まない、資本家の生産手段の国有化・社会化までその延長線上で闘わないのと同じことである。

従って、段階がある

長短の別はともかく終わる闘いである以上、単純な一本調子ではないし、永遠にくり返す循環でもない。そこには局面、段階というものがあることになる。

九十年四月一日の二度目の解雇から九二年五月二八日の中労委最終解決案までが、守勢の第一局面の時期。そこから事業体を確立して、基盤を作り闘っていく対峙の第二局面。二〇二億損害賠償事件の和解から攻勢への第三局面。九七年四月一日、国鉄分割民営化から十年で国鉄清算事業団の法の失効までが一応の節目となる。

しかし、「第三局面」といってもお互い人間のやっているものであるし、戦争でもあるので、自動的に勝利がもたらされるものではない。それが実際に聞いた話だが、「勝ちに行く第三局面」だから『連帯する会』の拡大も面白いし、物販もそこそこで……となった闘争団（のある人）もあつたというのである。第三局面の三、四合目までは来ていると思うが、私たちが手を緩めたりあきらめれば敗北もありうるのである。勝利だけが

「解決」ではなく、負けの解決もある。

付言すれば、国労の人には一貫して思い違いが一部あるようだ。あれかこれかではない。例えば、命令と和解。中労委に命令を求めつつ和解交渉はどんどんやっていったらいい。「長期と短期」も。一〇年二〇年闘えるような精神的はもとより物質的準備も出来上がったとき、翌日終わるのが争議である。敵もよく見ているので、「もったいない」位のときに勝利解決してしまうのが労働争議である。だから最後ほど手を緩めてはいけない。

だが北海道では、「子供も大きくなって専門学校に行き、出費がかさむので妻がパートに出て、家族会の活動が前のようにできなくなった。有利な局面だといわれてもそんなにうまくいってないし、もっと頑張れといわれても無理だ」という闘争団員の意見もあった。確かに厳しいと思うが、戦争は自分たちだけでやっているのではなく、相手がある。こちら長期化したいへんだが、相手はもったいついのである。

九七年四月一日には解雇争議問題に限らず懸案事項になんらかの解決策を与えねばならない（延期もありうるが解決は必要）。また例えば、九五年七月二〇日に亀井運輸大臣の政・労・使交渉テーブルへの協力要請をJR七社社長が一致して拒否していたのが、十一月の三度にわたる緒方運輸政務次官の呼び出しには微妙な変化を見せている。三島（北海道、九州、四国）JRの運賃値上げ問題などが出てきているからである。「一万人意見広告を拡げる」運動には、革マルの必死の妨害にもかかわらず、「あれ」と思う学者・文化人が参加されている。旧同盟の元中央役員でも熱烈な支援者がいる。マスコミ論調も十四年前の「国鉄・国労国賊論」とはうってかわり、政府の分割民営化の問題点を指摘する記事がたびたび載るようになった。

連合の鷲尾事務局長は九五年十月三日の交運労協定期総会で、「交運労協には国労さんがいらつしやる。連合に入っていた条件ができることが望ましいが、まだまだ、そうはならないと現状を認識している」と発言。九〇年四月一日当時の連合山岸会長の「国労は全労協に支援してもらったらしい」という発言と比べると、雲泥の差。

九月の北海道闘争団合宿で久しぶりに九州T闘争団のSさんと会った。連日ラーメンを背負い、戸別訪問で販売していた闘争団発足からの二年間のような悲愴感はなく、非常に安定した感じを受けた。事業体発足で経済的土台を築いたことが、大きな要因だと思う。

九五年九月六日のJR東労組の「管理職・非現業部会大集会」では二千五百人の管理職を前に、JR総連松崎会長・JR東日本松田社長が檄をとばしている。国労を「亀井組合」とまでこのしり、学生運動のセクト機関紙なみになっている。これは明らかな敵のあせりである。

京都コンピュータ学院などは経営を三分割したりなんかセンターを作ったりと、国鉄闘争を横目で見ながら不当労働行為を行う民間資本は多い。連合が四一年ぶりにナショナルセンターとして役員選挙をし、一割もの批判票を出し、政党支持では股ざきにあつているとき、日本労働運動における国労の位置は決定的だ。ぜひ二十万国労の再建で、日本労働運動の再生をともにはかりたいものだ。

しかし、「民間個別争議」との違い

しかし、国鉄闘争は「民間個別争議」とは決定的に違う面があり、それは解決の仕方にも求められるものである。予測の有無、路線・方針選択の結果、国策、会社本体に組織のあるなしなどであるが、鉄産総連との分裂攻撃にもめげず闘い抜いた国鉄闘争である。

弱小な組織維持のため、かなりのウルトラCまで用いて解決せねばならない「民間個別争議」とは自ずから根本を異にするのである。

具体的にいえば、「三極」の対決構図になっていると思うが、社会党ではないがこれが二極になってしまつて、亀井前運輸相対JR東の対決に埋没させられてしまつてはいけないということである。

もう一つの飛躍がなければ、最後の「山」はどうも越えられない

第三局面といったが、最後の山はひとしきり高い。「それを越えてもまたヤマが来るんでは」などと、ひと事のように言つてはられない。闘争団内部からわきいづる創意と勝つ「気迫」が必要だ。支援共闘、闘争団全国連絡会、国鉄まつりや一株株主会などもさることながら、「連帯する会」とDLR募金と事業体づくりが後の争議にも継承すべき国鉄闘争のオリジナルだと思うが、いつまでもKさんやYさんに教えてもらう運動から卒業して、最後は戦術含めて闘争団内部からどンドン提起すべきだ。事業体発足に匹敵するような運動を闘争団自らが作り出したとき、国鉄闘争は勝利を迎えることができるだろう。

沖繩とJRが支配体制の弱い環

国鉄・総評解体をなしとげ、政界再編成を完了させようとしている日本独占資本。しかし完璧そうで、支配体制のほころびはどこから噴出するかわからない。それが九五年の十・二一沖繩である。一少女とその家族の決意が長年にわたる民衆の不屈の闘いに火をつけ、運動をここまで高揚させてきた。京都の私たちも、森清範清水寺貫主らの呼びかけで十一月二〇日に円山野外音楽堂で決起集会をもつた。まさか日米首脳会談が延期されるとは思わなかったが、安保再定義も延期された。

国鉄闘争も世界一の鉄道会社・JR東日本を極左暴力集団・革マルに乗っ取られ、ランプから取り出してお化けを使いこなせなくなった魔法使いが政府・自民党である。

先述の不当解雇撤回を闘う京都コンピュータ学院労組は園田副委員長を沖繩集會に派遣したが、八万五千人結集の感動を高校生・仲村清子さんの「今日あきらめることは、明日の悲しい出来事につながる。だから私たちは決してあきらめてはいけません」という言葉で伝えた。決してあきらめず、闘い抜き、九六年を勝利の年にしよう！ (稲村 守)

◇ 編集部だより ◇

▽今回の「読者からのおたより」は年賀状から、読者諸氏の問題意識を抜粋させていただいた。「死に行く」社会党にどう備えるか、関心の多くはここにかかわるとの印象だ。

▽今年のお年玉は三つだった。まず「新社会党・平和連合」結成、二つは村山内閣総辞職、三つは社会党の葬儀となった党大会。

▽死者に思いを寄せるのも大事なこともかもしれないが、雄々しく生まれてきた「新社会党」を大きく強くたくましくすることが重要だ。情勢は九七年四月にむけ、いわゆる「弱者」の切り捨てがますますい勢いで進行しているからだ。

▽いつものお願い、読者をご紹介ください。いつでもどこでも出かけます。勉強会等に声をかけて下さい。「社会通信社」へどうぞ。

歴史科学Ⅱ社会科学の課題

—階級および階級闘争・護憲について(三)—

(一)

「一定の自然の法則を知り、この知識を組合せて宇宙船をつくり、とばすと、正確にとぶ。レオナルド・ダ・ヴィンチは、鳥を見てとぶことのできる機械をつくりたかったが、自然の法則に関する知識が乏しくて、飛行機を組立て、とばすことはできなかった。ジェット機がとび、宇宙船が組立てられ、しかもとぶのは、自然の法則に関する知識が豊富になったからである。

ジェット機がとんだから、自然の法則がなくなったのではない。自然の法則は、とぶ前も後も、そのままある。自然の必然の法則にそったから、とんだのである。人間は、このように自然を知ることによって、そのかぎりで自由な行動者になる。自然関係での人間の自由とは、自然を知って、意識して、積極的にこれに適応することである。

社会についても、同じことがいえる。需要に供給を適合させ、インフレーションを収束させようのは、これらの法則を知って、これに適応したからである。社会の必然的な法則にその行動をしたからである。この社会の法則を知り、これに意識的積極的に適応したかぎりにおいて、人間は自由となる。」(向坂逸郎『労働者の世界観』労大新書三三P)

と、向坂先生は、科学的社会主義の立場で自由論を述べられています。九五年十二月二七日の朝日新聞は、十一月の日本の完全失業率が三・四%となり、五三年に総務庁が現行の調査を開始して以来最悪となったことを、報じています。その前日の新聞には、九六年度国家予算政府案が報じられ、一般会計七五兆円、国債依存度二八%、九六年度末の国債残高二四一兆円というのですから、普通の家庭でしたら夜逃げをしなくてはならないところでしょう。

長続きする不況、労働強化による過労死が言われる一方での大就職難、物価の上昇に追い付かぬ賃上げ、管理職までもがその対象となって来たりストラという名の首切り、産業の空洞化等々。しかし大企業の業績だけは悪くはなっていないのです。「規制緩和」は、こうした状況に拍車をかけ、助長するだけです。商店街にはあふれるばかりの商品の山、山、山。街に出ると過剰生産物のなかで、窒息死しそうです。「豊富の中の貧困」とは資本主義社会の矛盾を表現する言葉として、古くから登場しているようですが、まさにピタリです。歴史科学Ⅱ社会科学の課題は、この解決にあると言っても過言ではないでしょう。

(二)

私達の日々暮らしている大地は、平べったくあるのではなく、球型をしていて、一日に一回転自転しながら、一年かかって太陽の周りを回っている。しかも二三・五度傾いているので、四季があるというような事は、私も教えられ知っていますし、義務教育を終るくらいの子供は誰でも知っているでしょう。今どき、地球の周りを太陽が回っているとか、はたまた、大地は平べったくてその先は滝になっているなどと真剣に議論する人は、おそら

くおりますまい。私も学校で教えられた知識として、地球が自転している程度のこととは知っておりますが、地球の運動に関することを証明できるかといえますと、全くできません。この拙文に眼を通していただいている方々の中にも、証明できる人は少ないのではないかと思うところです。

「汝、フイレンツェのヴィンチェンツィオ・ガリレイの子、ガリレイ、七〇歳は、あるものどもによつて教えられた誤った学説、すなわち、太陽は世界の中心にあつて不動、そして大地は日周運動をするという説を真実であると考へたため、またこの説を教えこんだ弟子をもつたため、また同じことにつきドイツのある数学者と手紙のやりとりをしたため、また汝は、同学説を真実であると証明している『太陽黒点について』と題する、いくつかの手紙を印刷したため、またしばしば、聖書からとり出されて汝にたいしてなされた反論にたいして聖書を自己流に解釈して答へたため、一六一五年、この聖省に告訴された。そしてそのさい、汝より汝のかつての弟子に宛てて書かれたといわれる手紙形式の書きものの写しが提出され、これにはコペルニクスの命題に従つて、聖書の真の意味と權威とに反するさまざまな命題が含まれていた。

したがつて当法廷は教皇閣下と当至高にして普遍的な異端審問所の枢機卿殿下の命により、それより生じ、神聖なる信仰にますます多く傷つける無秩序と損傷とを防ぐため、神学検邪官により太陽の静止性と大地の運動性との二命題が、つぎのように検定された。

太陽は世界の中心にあり、位置運動をしないという命題は、哲学的には不条理で誤りであり、形式的には明らかに聖書に矛盾するから異端である。

大地が世界の中心になく不動でもなく、さらに日周運動をもするという命題は、等しく哲学的には不条理で誤りで、神学的には、少ナクトモ信仰上ハ誤リデアルと考へられた。」

長い引用となりましたが、以上はガリレイに下された判決文の一部です。(『ガリレイ・ガリレイ』青木靖三著 岩波新書)

マルクスが歴史上の好きなヒーローとしてその名を挙げた二人のうちの一人、それはケプラーであったことは、前号で述べたとおりです。ケプラーはコペルニクスの地動説を数学的に証明し、惑星の運行の法則を発見したというところで、あまりにも有名です。ガリレイは実用化した天体望遠鏡をして、木星に四つの衛星のあることを発見し、コペルニクスの地動説に有力なる実証を与え、その地動説をもつて教皇の怒りを買ひ、監禁されたまま不遇のうちに亡くなったのです。

(三)

手許に二つの新聞の切りぬきがあります。二つとも朝日新聞のものですが、一つは八〇年十月二四日、もう一つは八九年九月二四日付けのものです。

一つ目の記事のタイトルは、「やつと地球は動いた、ガリレイ、三五〇年ぶり再審」とあります。「地動説を立証した十七世紀イタリアの天才ガリレイ・ガリレイ(一五六四—一六四二)を異端者として罰したローマ・カトリック教会の措置が近くバチカン自身の手で約三百五十年ぶりに再検討されることになり、関心を集めている。……バチカン当局は法王ヨハネ・パウロ二世の希望によりガリレイに対する措置を、客観的見地から、見直す方針という。ガリレイは自分で工夫した天体望遠鏡を駆使した天体観測によつてコペルニ

クスの地動説を裏付けたが、天動説を教義とする教会の怒りに触れて一六三三年二月、ローマで宗教裁判にかけられ、無理やり地動説を撤回させられた。この時彼がつぶやいたとされる「それでも地球は動く」という文句は有名。ガリレオはこの裁判で禁固刑を宣告されたが、当時の法王によって自宅軟禁に減刑され、八年間の余生をフィレンツェ近くの自宅内で送った。……。」という訳です。

二つ目の記事の見出しは「ガリレオ迫害誤りでした。ローマ法王が名誉を回復」というものです。「ローマ法王ヨハネ・パウロ二世は……、コペルニクスの地動説を支持したガリレオ・ガリレイをカトリック教会が迫害したのは誤りだったと初めて公式に認め、ガリレオの名誉を回復した。ガリレイは一六三三年、教会の天動説に反論、地球は宇宙の中心でもなく、太陽が動いているのではないと主張したため弾圧された。法王はガリレイが重力の実験をした斜塔のあることで有名なイタリア中部のピサ市で演説。自然界を理解するための基本原理として今日万人に認められているガリレオの科学的業績を初期の段階で否定した教会は軽率だった。」と自己批判した。」と。

(四)

「支配階級の思想はどの時代にも支配的な思想である。すなわち、社会の支配的な物質的な力であるところの階級は、同時にその社会の支配的な精神的な力である。物質的生産の手段を左右する階級は、それと同時に精神的生産の手段を左右する。だから同時にまた、精神的生産の手段を欠いている人々の思想は、おおむねこの階級に服従していることになる。支配的な思想とは支配的な物質的諸関係の観念的な表現、思想としてとらえられた支配的な物質的諸関係にほかならない。」(『ドイツ・イデオロギー』岩波文庫六六六)

とマルクスは述べます。そして『宣言』では、もつと簡潔明瞭に記されています。「思想の歴史の証明するところは、精神的生産は物質的生産とともに作り変えられるということのほかに何があるか? ある時代の支配的思想は、つねに支配階級の思想にすぎないものである。」(岩波文庫、六六六)と。

ガリレオの生きた中世の封建制社会を考えてみれば、判決文にあるように、「太陽が世界の中心にあり、位置運動をしないという命題」は中世社会に「無秩序と損傷とを」与え、支配階級にとつてみれば、「哲学的には不条理で誤り」というように、まさしく思想犯としてのガリレオが浮び上がって来ます。そして支配階級に媚びることなく、真理を追求し続けようとしたガリレオに対して、私達は感じ入る訳です。

ガリレオの闘いは、思想闘争であり、又、階級闘争であったと言えます。

ガリレオの名誉の回復には三五〇年余りを要しました。しかし突然そうなったのではなく、これはこの長い間、科学的真理の為の無数の人間の努力、行為があったからでしょう。ソ連・東欧の「社会主義」が崩壊し、マルクス主義に対する批難は嵐のごとくです。しかしマルクスの学問の方法は、マルクスの個人的主義主張、趣味趣向の問題ではないのです。そして、そのルネッサンスの為には、心ある無数の人達の努力が必要だと思えます。

(中澤秀行 つづく)

いかなる状況のもとでも解決策を探す

——社会主義とその成果を守るキューバ——

中国・ベトナム訪問のあとに

一九九五年二月、キューバ国家評議会議長フィデル・カストロが初めて日本を非公式訪問した。一月末から、中国、ベトナムを公式訪問した帰国の途中でのわずか二日半の東京滞在であったが、この立ち寄りには、中国、ベトナムという「社会主義的連帯」と友情の上に築かれ、民族解放と独立を守る共通の歴史的経験をもつアジアの二か国の訪問とは性格を異にしていた。中国では人民英雄記念碑、毛主席記念堂での献花、万里の長城の観光、西安では人工衛星管理センター、秦の始皇帝の兵馬俑坑博物館を訪ね、その付近では農民の家に招かれた。さらに上海では新経済開発地区を訪れ、証券取引所を見学した。また、ベトナムでは七三〇〇万人の国民を上げての大歓迎を受け、最も困難な時期に支援しあつた変わることのない、親密な友好、相互連帯を再確認した。

日本では、当初の給油のための滞在目的から、政府要人との会談がけつきよくは実現された。さきに日本の外務省はフィデル・カストロの日本立ち寄りは両国間に外交関係があるから問題はない、また政府要人との会談はないとの発表をしており、東京の駐日キューバ大使館は情報はないと答えていた（ジャパン・タイムス二月六日）。ぎりぎりになつてようやく実現した河野外相、村山首相との会談でも、日本政府はキューバの「民主化」（平和的移行によつて一九五九年以前の状態に戻すこと）と市場経済化を促し（朝日新聞一二月一三日）、キューバの実情についての深い考察に欠け、国民の視点からの交流とは距離の離れた性格のものとなつた。

一九九六年は経済回復一年目

三五年以上にわたつて継続する米国の経済封鎖、ソ連の崩壊と東ヨーロッパ社会主義経済市場の消滅は、キューバの国民経済に深刻な打撃を与えて来た。数年間の「特殊な時代」を今ようやく乗り切り、一九九六年を楽観主義で迎えている。そして、重要なことはキューバがこの間になしたことは、IMFの信用供与も、世界銀行のインフラ投資計画にも依存せずに実行したことである。一九九三年に集中した経済上の落ち込みは、貿易の非集中化、外資の漸進的開放を通じてある程度解決され、一九九四年には下降は止まった。

カリブ海の自然の美しさを開発する観光部門であっても投資の大半は国家によつてなされた。経済企画省大臣ホセ・ルイス・ロドリゲスは、外資はこの間の国家の経済発展に必要な役割を果たしたが、決定的要素ではなかった、と述べ、「われわれは国家の積極的経済的役割を放棄しない。われわれは、国营企業は効率的であると確信している。」と政府の自信を再確認した（第二回祖国と亡命者間に関する国際会議）。一九九五年、キューバの年間経済成長率は、二・五%の実績であつた。

複数政党制、社会の細分化を民主主義のモデルとして掲げたヨーロッパと比較すれば、キューバの経験は、一〇〇〇万人の党、数百万人が立候補でき、選挙される党であつた。フロリダ海峡を挟んで世界最強の帝国主義と対峙し、「まだやらなければならないことは、

たくさんある。これほどまでに困難だった時期はなかった。また、世界もそれを認めている。まさにこの認識こそ、闘い、抵抗し、勝利することのできる者たちに授けられるものである。」(フィデル・カストロ)と社会主義とその成果を堅持する中で、国民は「いかなる新政策、新法であれ、われわれに反対するために使用するものをさらに発明する事はもはや彼ら[米国]にはできない。」という自信にあふれている。

一九九六年は経済回復の第一年目であり、エネルギー分野での投資が求められている。一九九五年にすでに、ニッケル生産は七四%増、発電は一〇%増えた。原油生産は一四〇万トンを予想している。この分野では試掘と掘削、精油所の改善に大規模な外資が導入されておき、引き続きこの方向で努力がなされる。このような事業には時間をかけ、国家の努力にたいし外資に役割を果たさせようとしている(ロドリゲス経済企画省大臣)。新外資法が一九九五年九月に採択され、一〇〇%外資企業も可能になった。

その目的は社会主義を守り、発展させる要請であって、ネオリベラル的政策を追求し、資本主義に向かうことではない。外資は単なるビジネス上の相手であり、敵でもなく、また、恩人でもない。それは、ルールが明確に定義され、国家的利益が守られ、収賄の入る余地のない限りにおいて相互利益を生じさせる関係である。この外資法によれば、あらゆる人々、たとえCIAでも、が企業活動をするためにキューバにすることができ、それでも健康、教育、軍事分野に外資は入ることはできず、基幹産業の大規模民営化、外資企業に対する多大な免税措置、助成金は与えられない。

実際のところ、米国がキューバに投資できないのは、米国側の経済封鎖政策、トリセリ法、ヘルムズ・バートン法にある。これらの法は企業に対し、キューバへの投資を阻止し、罰則を課し、制裁を加え、報復するという自由貿易の原則さえ否定している。国連ではこの米国による経済制裁、「音の出ない原爆」の終結を求める決議を一月二日、一一七対三で総会で可決した。反対は、米国、イスラエル、ウズベキスタンだけであった。国連の要請にもかかわらず、商業と航行の自由に干渉する冷戦体制を残しているのは、まさに米国の側である。

健康ツーリズム

外国向け週刊新聞グラナマは、健康ツーリズムをいつでも掲載している。SERVIMEDという組織は保健省と密接な関係をもつ、国際レベルで健康サービスを行う政府の医科学機関であり、キューバに治療という特別の目的でやってくる外国人に医療サービスを行っている。世界の六〇か国、二〇〇以上の研究所、旅行社と契約しており、毎年多くの外国人が治療トリハビリに訪れている。

SERVIMEDの主要目的はキューバの医療とその技術の発展にあり、一九九五年、この分野での発展は目覚ましく、七月までにすでに四〇〇〇人を越す人々が利用した。ハバナに二四のセンター、他の都市に一二の施設をもち、首都郊外にある神経回復リハビリテーションセンターは国際的に評価が高く、毎年世界中から、何百人もが治療を求めてやってくる。その他、先進諸国に多く見られるストレスに関連した病気の治療、アル中、麻薬中毒の治療、外科手術、整形外科手術もよく知られている。また、温泉療法の施設もある。一九九六年には、第二回健康ツーリズムと温泉療法についての国際会議が予定されている。「われわれはいかなる状況のもとでも解決策を探す。」それはキューバ革命の自信であり、独立と主権を守る闘いと同意語である。

(富山栄子)

◇ 投稿 ◇

八名の党員、七名の党友支持者がまず参加

三島地区「新社会党・平和連合」準備会が発足

社会党は、一月一九日の大会で「党名」を変え、委員長・書記長がそれぞれ党首・幹事長となり、社会主義色を一掃するという。化粧を変えるだけでは足りない。中身も、護憲の旗をおろし、理念も政策も保守党に変質してしまう。「なんとかしなければ！」その思いの強い党員・支持者にとつて、三島市内のさる焼鳥屋の奥座敷で開いた一月三日の会合が忘れられない歴史的な会合になりそうです。

はじめは、「新党」問題をお互いに勉強し合おうということで党員や支持者に呼びかけました。勤務などの都合でどうしても参加できない人も何名かいることが事前に分かっていましたから、たとえ、結集した同志が五、六名でも、そこから出発するしかないという決意でした。

実際にフタを空けてみると、八名の党員、七名の党友・支持者が参加してくれました。支持者のなかには、永きにわたり三島地区労の議長を担ってきた大先輩や「平和」問題をテーマに毎月『市民講座』を開催している市民活動家の顔がありました。また、党の右傾化に納得できないと離党していた仲間も「この日を待っていた！」と興奮気味に参加してくれました。党員のAさんは、「新党へはともかく気になれない。ここを潮時に党活動から足を洗おうか、迷っている」と話していましたが、一五名のなかに入っていました。

まず、「新社会党・平和連合」事務局の原野人さんから約一時間半にわたり、社会党つぶしの背景や「新党」では護憲勢力を結集できないこと、などの報告を受けました。

参加者から「五名の結党は行き場を失くした党員の救助艇だ、という話がありました。その船にはエンジンとか帆がついていてひとり前に進むのですか？これから、まだ手こぎで船を進めるのはこの歳になってカッターイのだが」といったイジワルな質問が飛び出し、原さんが「エンジンはついていませんから皆さんで全力で漕ぎましょう」と応えると、その参加者も「仕方ない。また、手こぎからはじめるか」と納得するなど、社会党再建に向けた「新社会党」づくりに議論は発展しました。

「安保や消費税などダメなものダメとついづづけ、市民といっしょに運動をつくっていくには、この道しかない」「これからは堂々と街頭で運動ができる」「この場にきていない党員だつて悩んでいる筈だから、扉を広く開けて働きかけていこう」など、参加者の声を集約し、『新社会党・平和連合』準備会を発足させることができました。

当面の活動方針は、つぎの通りです。(1)「準備会」に代表者(市議)と事務局員をおく。(2)「準備会ニュース」を発行し、政策の勉強や交流をはかる。(3)中央の結党大会前に一〇〇名規模の『市民集会』を開催する。(4)「ニュース」を配布し、『市民集会』の参加を呼びかけながら組織の拡大に努力する。

なお、隣接する沼津・富士・田方地区などひとつの連合体をつくるといった構想もありましたが、まず、三島地区に準備会を発足させ、隣接する地区に広げていこうという意志統一になりました。

全国の組織づくりに比べれば、人数も取り組みの規模も微々たるものですが、確かな展望をもって頑張るつもりです。これまでは、社会党に対するイラ立ちや不満が先行して燃えるような行動になり切れませんでした。仲間たちもこれでフツ切れたようです。皆んなの表情が生き生きとしてきましたから大丈夫です。

(三島・渡部)

◇ 読者からのおたより ◇

第三幕の政局。じつくりと。(小金井・N) 本年こそ眈(まなじり)を決して闘うとき。(中野・W) 九五年は終りの年、九六年は始まりの年。(神戸・F)

それにしてもどうなっちゃったのね、社会党は。社会党にノスタルジアを感じているこの頃です。(保谷・N)

働く者の労苦が報われる社会・政治になるように職場・地域でがんばる。(広島・T)

今年も大激動の年になりそう。暗い海を照らす燈台のように、たえず情報を。(高沢寅男)

歴史をつくるのは私たちだと思っています。(福島・F)

いろいろあり過ぎて先を見通すことの困難を感じています。今年も大きく旗を掲げて、先頭に立つてがんばって。(長野・U子)

自覚的な政治勢力の結集、日本の民主主義勢力の試練の時。歴史を痛感。(山形・T)

いよいよ護憲の党の到着到来ですね。ともにがんばりましょう。(松江・H)

「社会通信」本場に役立っています。今後も燈台役を。(大阪・O)

「新社会党・平和連合」を支える地方組織づくりが勝負どころ。(千葉・U)

社会党を何とか再建しようと必死にがんばっておられる少数の方々を、なぜ協会は支援しないのか。私は大いに疑問を抱いております。(宮城・N)

旗を立てるチャンス。皆さんの健康と発展を！(新潟・K)

歴史が動くときの動揺と混沌の深さ、それらを押し流す奔流の激しさを、私の狭い世界でも実感する毎日です。(東京・M)

ここしばらくは政治の激動は続くと思いますが、今の時代だからこそ、「生きる」ことに確信をもって全力でがんばりたい。(千葉・N)

歴史を誤らぬよう道を切り拓いていきましょう。(東京・T)

「新社会党」の中心のイデオロギーは？(千葉・M)

今年は何か新しい転換の年(良い方向への)のような気がします。いつも生活の場から考えていく視点をもちたいと思います。(埼玉・S)

新年とともに私たちは意を決して、新社会党の小さな旗上げをする他なくなりました。大きく育てるために、限らないご支援をぜひお願いします。(原野人)

一月一九日の党大会以降、もう社会党に見切りをつけようと思っています。(千葉・K)

護憲のゆきしろ、やがては大海へ(山形・M)

自分の置かれた場所ががんばります。(青森・K)

政界の変貌は目を覆うばかりですが、私は地元の高レベル放射性廃棄物問題にとり組み今年も尽力して参ります。(関晴正)

ヘーゲルは高くそびえ、かつ孤独で会話を拒否しているようでした。(東京・H)

護憲の党再生の羅針盤として、今年も元気の出る情報を発信して下さい。(大阪・T)

どうなる新党、どうする社会党、今年も決断の年です。(尾花沢・S)

幕の内弁当を希望してノリ弁じゃ。党名変更しても中身が問題。(旭川・A)

今年「日本社会党」を善良な人々の「希望の党」として「再建」しましょう。私達一人一人の「意志と努力」さえあればできるのですから。(えひめ・N)

矢田部さん達、いよいよ「新社会党・平和連合」ですか。我々、地方でもがんばらねばと決起しております。銚子無線局も一月二四日公判となります。(銚子・K)